



コタンメール

Kotanmail No.64

北海道白老郡白老町若草町 2-3-4

財団法人 アイヌ民族博物館

2012年11月20日発行

<http://www.ainu-museum.or.jp>

「アイヌのお祭りは神主の養成所」 10年目のコタンノミ

去る11月3日、「秋のコタンノミ（大祭）」が開催されました。コタンノミは春秋の年2回、自然の恵みに感謝して行われるアイヌの伝統儀式です。当館で開催するようになって今回でちょうど10年目、春秋あわせて第20回を数えます。これを記念して午前中は「コタン市」が立ち、例年とは少し趣の異なるものになりました。

ほかにも目を引いたのが「若手の活躍」です。儀式の準備から実施まで、いつも以上に若手が重要な役割を果たしました。

現在当館では、(財)アイヌ文化振興・研究推進機構の人材育成プログラムを委託され、全道から集まった20代の若者たち5人が3年間にわたってアイヌの歴史や文化を学び、次代の担い手となるべく研さんの日々を送っています。今学んでいるのは二期生で、男性が多いこともあって2011年春の開講当初から儀式には熱心です。毎月1日の月例祭や年2回のコタンノミでは、当館職員や北原次郎太さん（北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授）の指導のもと、イノウ（木の御幣）などの祭具づくりから儀式の作法、祈りまで、アイヌ男性としての素養を身につけるべく励んでいます。特に祈りに関しては、自分でアイヌ語の祈り言葉やメロディを考え、実際の儀式で実践しています。昔のアイヌの長老ならともかく、これは誰でもできることではな



く、今の時代にそうそう目にする光景でもありません。静まりかえった儀式の場で声を出し、節をつけて祈るのは、慣れないうちは声がふるえたりとても緊張するもので、彼らもまだたどたどしいながらも大健闘しています。

当館のコタンノミは静内（現在の新ひだか町）の葛野辰次郎氏（2002年没）の伝承を元にしてはいますが、以下はその長老の言葉です。「最初は棒読みであっても、それがだんだん年をとることによって、節も直せば、発音も直せば立派な言葉になるんだぞって。俺はそれを楽しみにしているの」「だからね、アイヌのお祭りはね、それこそ神主の養成所」。当館のコタンノミは、神主の養成所の役割は確かに果たせた10年だったなあ、と思います。（安田益穂）

「アイヌの神様ものがたり」

12月1日（土）午後2時より、白老中央公民館において、NHK室蘭放送局開局70周年記念ファミリー向けイベント「アイヌの神様ものがたり」が開催されます。

このイベントは、トンコリ奏者のOKIやMAREWREWによる影絵「ポロ・オйна～超人アイヌラックル伝～」や、白老町内の絵本の朗読の会の平松幸子さんによる「セミ神さまのお告げ」の朗読、そして当館職員によるアイヌの音楽と踊りなどの公演など、楽しい企画を多数予定しています。

当館は、絵本「セミ神さまのお告げ」の読み聞かせで、バックミュージックとしてトンコリやムックリを演奏します。また、「アイヌの音楽と踊り」では、神謡の語り、ウポポ（座り歌）、イヨマンテリムセ（熊の霊送りの踊り）などの公演を行います。

会場のみなさまも参加できるような踊りも考えておりますので、ぜひご来場ください。

同イベントについて、また入場整理券等については、NHK室蘭放送局（電話：0143-22-7271）へお問い合わせください。

NHK室蘭放送局
開局70周年記念

ファミリー向けイベント

アイヌの 神様ものがたり

絵本
読み聞かせ

歌と
踊り

影絵

とき 平成24年12月1日(土)午後2時～3時30分

ところ 白老町中央公民館(白老郡白老町本町1丁目1番1号)

主催 NHK室蘭放送局 共催 白老町、白老町教育委員会、財団法人 アイヌ民族博物館
後援 財団法人 アイヌ文化振興・研究推進機構、社団法人 北海道アイヌ協会、北海道新聞白老支社、北海道教育庁白老教育課

家庭でアイヌ語

右の写真は先日インターネット動画サイト youtube (ユーザー) に掲載されたビデオの一場面で、6歳と4歳の子どもがアイヌ語の物語や歌を演じています。絵本になっていて、絵(アニメ)やアイヌ語訳はご両親が担当、多才な一家4人の共作です。

子供の成長をビデオに撮って動画サイトに投稿、というのはよく聞く話。このビデオもそういった「親バカ」の要素がなくありませんが(失礼)、大きく違うのは、一家が投稿したのがアイヌ語教材として作成されたビデオだということ。確かにこれを見て「うちの子にも覚えさせよう」という家庭が出てきても不思議ではありませんし、むしろそれが可能なように作られています。投稿者(父)によれば、「アイヌ語の新しい話し手が育ちつつあることを知らせる意味で始めた」とのこと。

「今、アイヌ語を話せる人っているの?」とは、よく博物館に寄せられる質問です。

2009年、ユネスコ(国連教育科学文化機関)は、世界に6000前後ある言語の中で、アイヌ語を「消滅危機言語」の中でも最高レベルの「極めて深刻」な危機にあると報告しました。まわりを見ても、確かにアイヌ語で会話をしている人たちを見ることはありませんよね? でも、だからといって、アイヌ語は消えてなくなると決まったものでもありませんし、アイヌ語の復興の努力は「無理」でも「無駄」でもありません。本気で復活させようと考え、行動する人がいる限りは。

よく例として引き合いに出されるのがヘブライ語(イスラエルの公用語)です。日常語としては消滅してから2000年後、ベン・イェフダーというユダヤ人が我が子をヘブライ語を母語として育てたことを契機に20世紀になって復活、現在ではイスラエルの公用語にまでなりました。当初は家庭内でヘブライ語を使う家族が10家族現れるまでに20年を要したとのこと。一旦話されなくなった言葉が復活したのはこれが唯一の例とされています。

なお、ビデオタイトルの「みもふたもない昔話」、何が「みもふたもない」のか内容が気になるところですが、わが家の高校生の息子によると「ネタバレ」は「実写化」「コスプレ」と並んで「日本三大NG」に当たるそうなので、ぜひご自身でご確認ください。そして「グッド!」をワンクリック!

(安田益穂)



(それぞれ動画のタイトルで検索すればヒットします)

竹内職員が優良勤労青少年表彰

第21回白老町青少年育成大会において、当館の竹内章吾職員が優良勤労青少年表彰を受けました。竹内職員は現在28歳。2006年に当館に採用され、2008年から正職員として伝承部門に在籍しています。まだ6年目ながら年間1000回の解説、2000回近い古式舞踊出演をこなし、早くも当館の主力のひとりとして欠かせない存在となっています。ゆっくり落ち着いた口調の解説は先輩解説者と好対照。剣の舞や弓の舞など男踊りの勇壮さも好評で、職場にもすっかりとけ込み、今後の一層の活躍が期待されます。

